

## 《真宗宗歌》の誕生

—「懸賞歌」としてのイベント性に着目して—

山口 篤 子

はじめに

浄土真宗の法座や行事はしばしば、合掌・礼拝と仏教讃歌<sup>\*1</sup>で始まり、仏教讃歌と合掌・礼拝で終わる。多くの場合、開会にあたり歌われるのが《真宗宗歌》、閉会に際しては《恩徳讃》<sup>\*2</sup>である。このことは宗派内では慣例として、当たり前のように行われているが、他宗教の人々からは驚かれることが多い。

《真宗宗歌》は、浄土真宗の立教開宗700年を機に結成された真宗各派協和会<sup>\*3</sup>により1923（大正12）年に発表され、以来、真宗の僧侶・門徒によって100年間歌い継がれてきた。先に述べたように、法座や行事はもちろん、事務的な会議の折にも歌われる他、宗門関係学校で用いられる聖典や仏教讃歌集にも、校歌と並んで掲載されている。

その一方で、真宗各派協和会の「真宗各派協約」<sup>\*4</sup>（1936年発布）及び「真宗各派協和会規則」<sup>\*5</sup>（発布年不明）、さらに後継団体である真宗教団連合の「真宗各派協約」（1967年発布）及び「真宗教団連合憲章」（1969年制定、1970年発行）には、宗歌に関する条項は設けられていない。つまり、少なくとも現在においては、《真宗宗歌》を歌うという行為は何らかの拘束力をもってなされているのではなく、行事の主催者によって自主的に行われているのである。

このことは、《真宗宗歌》がいかに真宗関係者の活動や生活に深く根付き、浸透しているかを示しているが、改めて「宗歌」とは何なのか、と問われると、回答に困るのではないだろうか。歌ったことがあれば経験則から、あるいは「宗歌」という字面から想像は可能であろうが、「宗歌」の存在を知らない人に対してはどのように説明するのが適切であろうか。

『仏教音楽辞典』では、《真宗宗歌》について次のように説明している。

大正一二年（一九二三）の立教開宗七〇〇年記念に真宗一〇派で結成した真宗各派協和会（現・真宗教団連合）が毎日新聞紙上で公募し、浄土真宗大谷派土呂基の作品を選定。東京音楽学校（現・東京芸大）教授島崎赤太郎（一八七四—一九三三）に作曲を委嘱した。<sup>\*6</sup>

また、真宗教団連合の公式ウェブサイトでは、次のように紹介している。

1923（大正12）年、立教開宗700年記念法要に際し、真宗各派協和会（現真宗教団連合）が結成され、「宗歌」を公募。真宗大谷派の僧侶であった土呂基氏の作品が採用され、東京音楽大学教授であった島崎赤太郎氏によって作曲されました。<sup>\*7</sup>

これらは、《真宗宗歌》の制作事情を説明してはいるが、「宗歌」というジャンルについては何も触れていない。

「宗歌」は浄土真宗固有のものではなく、少なくとも仏教においては、複数の宗

**真宗宗歌** 作詞 土呂 基  
作曲 島崎赤太郎



**真宗宗歌**

深きみのりにあいまつる  
身のさち何にたどうべき  
ひたすら道を聞き開き  
まことの御言いだかかん  
永功の聞より教われし  
身のさち何にくらふべき  
六字の御名を称えつつ  
世のなりわいにいそしまん  
海の内外のへだてなく  
みおやの徳のとうときを  
わがはらからにつたえつつ  
浄土の旅を共にせん

派が「宗歌」を定めている（この点については、1章にて詳述）。《〇〇宗宗歌》という名称から、「国歌」「校歌」、あるいは「社歌」といった言葉を連想する人は少なくないだろう。渡辺裕は、これら「団体歌」と呼ばれる作品群が、「人々のその共同体への帰属意識や成員相互の連帯意識を高めるうえで大きな役割を果たしてきた」<sup>\*8</sup>と指摘している。また、福本康之は、大正期から主に儀式歌として歌われてきた仏教讃歌が、「信者が共に歌う『宗教コミュニティ』の音楽としての性格」を有していることを指摘している<sup>\*9</sup>。《真宗宗歌》も団体歌であり、用いられ方としては儀式歌でもあるため同様の役割を担ってきたわけだが、

譜例1 《真宗宗歌》

前述のように真宗各派協和会はそれを懸賞募集という方法で制作した。それゆえ、《真宗宗歌》は「懸賞歌」としての側面ももつ。

近代日本において「懸賞」による歌の制作がいつ頃から始まったのか、特定することは難しい。新聞社が行ったものに限れば、1894（明治27）年の読売新聞社による軍歌の懸賞募集、1902（明治35）年の大阪朝日新聞社による《大阪市の歌》募集などが先駆的なもので、歌の公募が大きなイベントとなり、紙面を大きく飾るようになるのは大正末以後とされる<sup>\*10</sup>。

このように、懸賞は何らかのメディアの力を借りて行われることが多いイベントであるが、社会学者の吉見俊哉は、「メディア・イベント」を以下の三つに分類している<sup>\*11</sup>。ひとつめは、新聞社や放送局といった企業としてのマス・メディアが企画・演出するイベントである。ふたつめは、マス・メディアによって大規模に中継・報道されるイベントで、そのイベントを開催する主体は新聞社や放送局とは限らない。みつめは、メディアによって中継・報道されることによりイベント化された現実（社会的事件）である。

《真宗宗歌》の制作は、吉見のいう第二のメディア・イベントに分類される。本稿の内容は宗教専門誌『中外日報』の記事に多くを負うが、その紙面を繰っていくと、同時期に真宗以外の仏教教団においても、宗歌や何らかの讃仰歌を、歌詞の公募によって創作する動きが確認できた。しかしほとんどの場合、その報道は「募集することになった」、あるいは「制作された」という報告に過ぎず、《真宗宗歌》の制作過程ほど詳細には踏み込んでいない。それだけ、《真宗宗歌》の制作はもちろん、その背景にある真宗各派協和会の結成とその動向、さらに真宗の立教開宗700年記念法要という一連の出来事は、宗教専門紙にとってニュースとしての価値があった（多少はゴシップ的な要素もあったにせよ）ということであろう。

以上から本稿では、《真宗宗歌》の「団体歌」と「懸賞歌」というふたつの側面に着目し、《真宗宗歌》制作時の状況を改めて整理するとともに、その意義を問いつつ試みる。

当時の状況を調査するために、真宗教団連合に当時の資料の所在を尋ねたが、本稿執筆時点（2023年6月）で回答が得られないため、本稿では宗教専門紙『中外日報』、本願寺派の機関誌『教海一瀾』、同じく真宗大谷派の『宗報』を、真宗各派協和会の結成が協議され始めた1921年10月から、立教開宗700年記念法要修行後の1923年5月までを調査した。

なお、本稿では、引用文中の旧字体は新字体に改めた。仮名遣いや送り仮名は原文のままとした。

## 1. 「宗歌」のはじまり

浄土真宗本願寺派総合研究所が所蔵する仏教音楽関係資料には、仏教各派の「宗歌」の楽譜が収められている（表1）。本門仏立宗をのぞき、これらの宗歌は大正から昭和戦前期に歌われるようになった（ただし正式な制定が、戦後のケースもある）。また、曹洞宗と本門仏立宗以外の宗派では、作詞にそれぞれの宗祖の名がある。これは、宗祖が詠んだ和歌を歌詞としているためである。もっとも《曹洞宗宗歌》は、歌詞の前半は創作であるが、後半は道元の和歌である（各宗歌については未調査の部分も多く、詳細は稿を改めて論じることとしたい）。

これらのうち、浄土宗の宗歌《月かげ》については、『新纂浄土宗大辞典』に「宗歌」という項目があり、浄土宗における宗歌の成り立ちや法規的な位置づけについて解説されている。ここでは、「宗歌という概念は明治中期以降のものと考えられ、西欧諸国での聖歌や讃美歌にならって、讃仏歌や仏教唱歌が作られるようになった」\*12 と述べられている。

この説明はいささか文意が取りにくいいため、補足すると、「宗歌」という概念が生まれたのは、「讃仏歌」\*13 や「仏教唱歌」\*14 といった、西洋音楽の語法により作曲された仏教的な音楽（仏教讃歌）が作られるようになった明治中期以降だ\*15、という意味だと思われる。つまり、「宗歌」は、西洋音楽との結びつきが前提とされている。

さらにここでは、《月かげ》のメロディーを、1906（明治39）年に仏教音楽会（主宰：梶宝順 他）が発刊した『仏教唱歌集』に掲載の《各宗祖の歌》（写真1）

宗派名	曲名	詞	曲
高野山真言宗	宗歌いろは歌	弘法大師	永井幸次
浄土宗	月かげ	法然上人	松濤基（編曲）
浄土真宗	真宗宗歌	土呂 基	島崎赤太郎
曹洞宗	曹洞宗宗歌	大内青巒	長妻完至
天台宗	天台宗宗歌	伝教大師	古旋律
天台宗真盛派	天台宗真盛派宗歌	法道和尚	弘田龍太郎
日蓮宗	立ち渡る	日蓮聖人御詠	弘田龍太郎
本門仏立宗	本門仏立宗宗歌	西条八十	古賀政男

表1 仏教各派の宗歌（宗派名の五十音順）  
 浄土真宗本願寺派総合研究所「仏教音楽関係資料」より  
 各派の名称・曲名・作詞者名・作曲者は資料記載のまま

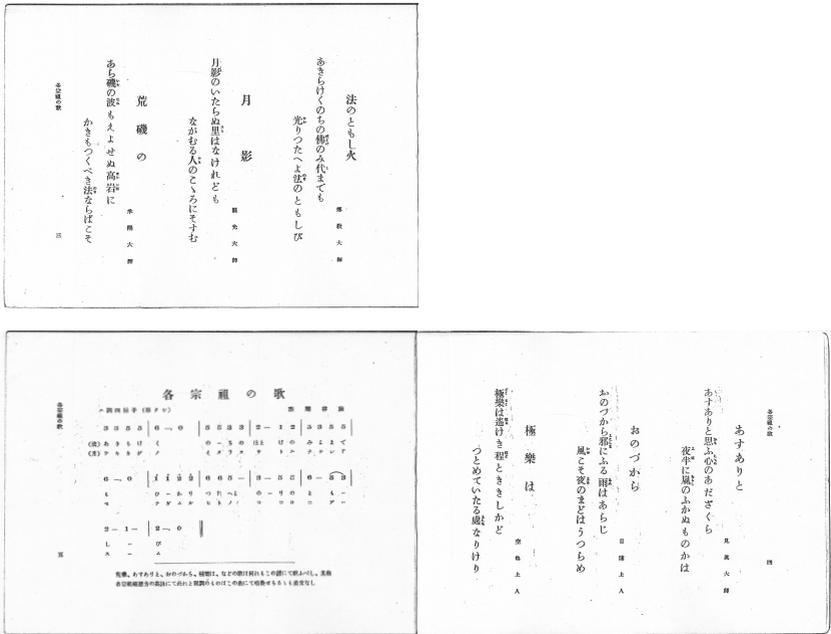


写真1 《各宗祖の歌》『仏教唱歌集』（仏教音楽会、1906年）より \*16

に拠る、とする。

《各宗祖の歌》のメロディーは数字譜で書かれ、「雅楽旋律 \*17」と記されている。歌詞は、伝教大師・円光大師・承陽大師・見真大師・日蓮上人・空也上人 \*18 による和歌であり、2 首目の「月影」が浄土宗では現在の宗歌というわけだ。それ以外にも、1 首目の「法のともし火」と題された和歌は天台宗、3 首目の「荒磯の」は曹洞宗の宗歌（あるいはその一部）として、現在も歌われており、特に天台宗では旋律も同一のものが用いられている（表1では「古旋律」となっている）。

なお、親鸞に関しては、得度に際して詠んだと伝えられる和歌「明日ありと思う心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものかは」が選ばれている。現在、親鸞の著作に作曲する場合、歌詞には和讃が選ばれることが多い \*19。《各宗祖の歌》では、他の歌詞と語調をそろえるために、和歌が選択されたと考えられるが、浄土真宗本願寺派総合研究所が所蔵する仏教音楽資料でも上記の和歌に作曲した作品は限られており、希少な例といえよう。

## 2. 《真宗宗歌》の制作過程

ここからは、真宗各派協和会の結成から《真宗宗歌》が発表されるまでの過程を、資料に基づき整理する（年表1）。

年月日	出来事
1921/10/21	真宗各派協和会結成に向けた協議が始まる
1921/11/7	各派共通の宗歌を懸賞募集によって制作することが決定される
1922/5/30	懸賞金額について協議（宗歌は1等200円、2等100円）
1922/6末?～ 11/30	歌詞募集期間 広告掲載：『中外日報』6/29、『大阪朝日』7/1、『大阪毎日』7/2、『読売』7/3、『東京朝日』『東京日日』7/4、本願寺派・大谷派機関誌
1923/3/9	歌詞の選者決定（井澤勝什・痴山義亮・橋川正・野村成仁・佐々木信綱）
1923/3/23	二等入選作品に、島崎赤太郎が作曲した楽譜が到着（一等はなし）
1923/3末?	真宗宗歌発表 石版色摺したものを一般に頒布

年表1 《真宗宗歌》制作過程

### （1）真宗各派協和会の設立

中西直樹によれば、真宗各派の連合組織としては、1900年から1901年にかけて結成の動きがあったものの、当時は仏教公認教運動や宗教法案への対応をめぐる大谷派と本願寺派が激しく対立しており、自然消滅したらしい。その後、立教開宗700年を機に協調の動きがみられるようになった<sup>\*20</sup>。その様子を『中外日報』は、次のように伝えている。

各派を融合し僧俗の差別を撤して親鸞聖人を鑲仰し現代に其の信仰を普及する有力なる団体を組織せんことを希望すとの声起り<sup>\*21</sup>

その声をうけて、1921年10月21日、真宗各派の代表者が集まり、第1回の打合せが行われ、「開宗記念日の一定、服装の統一、勤式の統一、宗歌の募集等」が話題にあがった<sup>\*22</sup>。

## (2) 宗歌募集の計画

ところで、10月21日の会合に先立って、『中外日報』には、「動き出した開宗記念運動／東本願寺の計画進捗／鑽仰歌等を広く真宗各派合同で懸賞募集の話が進められてゐる」という見出しで、次のような記事が掲載されている。

其中宗祖伝及鑽仰歌は広く世上の新聞に公告して懸賞募集する計画である  
其の懸賞募集については此頃新しい考が湧いて来てゐる夫は西本願寺の方も同様の考があるらしく伝へられるので東西若しくは真宗各派の合同で懸賞募集をやつて、各派の浪費を防ぐと共に権威のあるものたらしめやうといふ  
この案は可なり共鳴者が増しつつある様だから各派懇談会の問題となる事だらう \*<sup>23</sup> (下線は引用者)

大谷派では真宗各派協議会の結成に先立ち、宗派として「宗祖伝及鑽仰歌」を懸賞募集する計画であつた、という。実際、大谷派の『宗報』1921年10月号には「立教開宗700年を迎へて」という記事が掲載されており、10項目の事業計画が紹介されている。そのうち、「六、記念出版」としてあげられている9項目のなかに「宗祖伝（懸賞募集）」「宗祖讚仰歌（同上）」とある。

『中外』の記事は、これと同様の計画が本願寺派にもあり（ただし、本願寺派の『教海一瀾』にはそのような記述はみられない）、合同で募集を行うことになるだろう、と報じている。各派合同でこの事業を行うことが「浪費を防ぐ」と同時に、作品の権威付けにつながる、とみなされていることは興味深い。

10月21日に続き、11月7日に行われた会合では、次の引用のように、7項目にわたる記念事業の計画が話し合われ、真宗各派協議会事務所を設置し、種々の事業を進めていくこととなった。このとき、宗歌を懸賞にて制作することも決定された。

協議の結果は（イ）開宗記念日は四月十五日と決定し、（ロ）の祖伝編纂と、（ハ）の各派共通の宗歌は共に懸賞を以て公募する事に決定、（ニ）の各派立会の場合に於ける級制一定と、（ホ）の同上の場合に於ける簡易なる勤式制定とは共に宿題として尚研究を重ねる事になつた。（ヘ）児童用仏教絵本類の作製と、（ト）開宗記念日に法要に際し宝物展覽共通券の発行の二件は共に可決した。\*<sup>24</sup> (下線は引用者)

12月17日には、第1回常任委員会<sup>\*25</sup>が行われた。『中外』では、「会則の研究」の他、「共同の事業として祖徳宣伝宗歌等の懸賞募集に関する条件等を仔細に相談した」と簡略に記されている<sup>\*26</sup>。大谷派『宗報』では、この会合での協議決定事項がより詳細に報告されており、11月7日の話し合いから計画が前進したことがわかる。

一、開宗記念日（四月十五日）に関する件

一、简单なる法要を執行すること

イ、各派協同執行の場合

正信偈、念仏、回向とす

ロ、単独執行の場合

自派の勤式に依る

ハ、服装黒衣、墨袈裟

一、各派連合して各種（講演、説教又は文書に依る）宣伝をなすこと

一、京都所在の各派の各団体は本願寺派本山に参拝し興正派本山大谷派本山の参拝を遂げ仏光寺派本山に参拝の後市公会堂に集合し各派連合の講演を聞き解散すること

二、祖徳鑽仰を主とする著述懸賞募集に関する件

祖徳に就き五乃至十の標目を定め之に依りて鑽仰せるものを募集すること

右標目は各派より大正十一年一月十五日迄に各派協議会事務所に提出し常任委員会に於て選定すること

三、各派共通合唱し得る宗歌懸賞募集に関する件

宗歌及び祖徳鑽仰歌を募集すること

四、各派立会の場合に於ける服装一定の件

甲、半素絹（色衣）、袴、五條

乙、黒衣、墨袈裟

但白服は甲乙に通ず

五、各派立会の場合に於ける勤式制定の件

伽陀、小経、念仏、回向とす

但伽陀回向は節付とすること

右節付は魚山に简单なるものを依頼す此依頼手続は事務所よりなすこと<sup>\*27</sup>

（下線は引用者）

この話し合いをうけて、『中外』では「多分新春早々懸賞募集の広告をやるものと思はれる」と報じられたが、その後話し合いは一時中断されたようである。理由は定かでない。その後、1922年3月24日、「真宗各派の協議会は久しく中絶してゐた」が徐々に会合がもたれ、各種事業の協議が行われ、「宗歌、祖徳鑽仰歌も懸賞募集とする」ことが協議された\*28。さらに5月30日の会合で、懸賞金額等が話し合われ\*29、ようやく6月から募集が始まった。

(3) 募集広告とその内容

写真2は、『中外日報』1922年6月29日付4面に掲載された「親鸞聖人開宗記念懸賞募集」の広告である。各派機関誌にも同様の広告が掲載された。また、『仏教音楽辞典』で「毎日新聞紙上で公募し」とされていた一般紙での広告については、実際には7月1日に『大阪朝日新聞』、翌2日に『大阪毎日新聞』、3日に『読売新聞』、4日に『東京朝日新聞』と『東京日日新聞』に広告が掲載されたことが分かった。広告掲載は各紙1回限りではあるものの、この公募にかかる真宗各派協会の熱が伝わってくる。その背景には懸賞募集自体のイベント性を高めることで広く立教開宗700年をアピールするとともに、宗勢の拡大へつなげたいという思惑があったのだろう。

**親鸞聖人開宗記念懸賞募集**

**趣意書**

社會の改造は文化促進の運動により文化の促進は其根帯を宗教的信仰に置き而も其宗教的信仰は日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依らざる可らず。是れ聖人の信仰が我國現代の思想を風靡しつゝある所以也。聖人浄土真宗を開創せられしより明年は正に滿七百年、本會は此立教開宗を記念す可く茲に左の規定に依りに祖徳鑽仰宗義宣揚に関する創作文并に今後永久に用ふる宗歌を募集し以て我民衆文化の精華を飾らむとす。奮つて応募せられむ事を望む。

創作文  
宗歌

**賞金** 一等 金壹千圓 二等 金壹百圓 三等 金貳百圓 四等 金壹圓

**規定** 一、資格 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。二、内容 宗義の宣揚に關するもの。三、形式 漢字、和字、混合、自由。四、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。五、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。六、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。七、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。八、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。九、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。十、応募 凡そ日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依るもの。

**真宗各派協和會事務所**

写真2 『中外日報』に掲載された広告

では、広告の文面を詳細にみていこう。以下は、趣意書の文面である。

社會の改造は文化促進の運動により文化の促進は其根帯を宗教的信仰に置き而も其宗教的信仰は日本民族自らが生める親鸞聖人の民族的宗教に依らざる可らず。是れ聖人の信仰が我國現代の思想を風靡しつゝある所以也。聖人浄土真宗を開創せられしより明年は正に滿七百年、本會は此立教開宗を記念す可く茲に左の規定に依りに祖徳鑽仰宗義宣揚に関する創作文并に今後永久に用ふる宗歌を募集し以て我民衆文化の精華を飾らむとす。奮つて応募せられむ事を望む。

大正期の日本では、日露戦争の勝利をうけて一挙に国際的な地位が高まった反面、国民は政治的・経済的にも貧しいままだったため、そのギャップを埋めるべく社会の「改造」が叫ばれた<sup>\*30</sup>。趣意書も、そのような社会情勢を受けて書き出されている。さらに1910年代後半から起こっていた「親鸞ブーム」に言及したうえで、立教開宗700年の記念として「祖徳鑽仰宗義宣揚に関する創作文并に今後永久に用ふる宗歌を募集」する、とした。創作文や宗歌とともに協議されていた「祖徳鑽仰歌」の募集は、最終的に中止されたようである。

次に、募集規定をみてみよう。計画段階では5～10程度の項目を設けるとされていた著述については、「創作文」として、「一般家庭読み物」で3項目（（一）親鸞聖人に現れたる他力信仰（二）親鸞聖人の時代と立教開宗（三）真宗信徒の家庭等）を、「平易にして清新なる口語体」で創作することを求めている。一方「宗歌」については、「内容」は「本宗各派の諸種会合の節常に合唱するに適當なるもの」、「句調（字足）は随意たる事但し節を分つ場合は三節以内とす」と、さほど細かい条件は付けられていない。

趣意書で「今後永久に用ふる」とされた宗歌を歌う機会については、この広告の掲載前、西本願寺の機関誌『教海一瀾』1922年5月号に「宗歌は国家の祝日に「君が代」を歌ふが如く、各派共通して一般門信徒に唱へさする」<sup>\*31</sup>とあり、当初から目的が明確に定められていたことがわかる。

また賞金は、創作文の一等が2,000円、二等1,000円に対し、宗歌は一等が200円、二等が100円であった。金額の差は、宗歌と創作文の規模の違いによるものだろう（創作文の字数は「400字詰原稿用紙200枚内外」、つまり8万字）。ちなみに同じ頃、1921年10月から1年かけて行われた《東京市歌》の公募<sup>\*32</sup>では、市民歌の一等賞金は500円、二等は300円、また童謡の一等賞金は300円、二等が100円であった。これに比べると、宗歌の賞金額は多少抑え気味という印象である。ちなみに少し時代はさかのぼるが、1920（大正9）年の大卒銀行員の初任給が40円だったといわれ、また1918年の米騒動後、1920年で米10kgの小売相場が3.7円である。これらに鑑みると、それなりの賞金が用意されていたといえるだろう。

#### （4）審査と作曲

募集開始後、宗歌には7月上旬で15編<sup>\*33</sup>、9月で約60編<sup>\*34</sup>、そして最終的には192編<sup>\*35</sup>の応募があった。一方、創作文は、最終的に53篇の応募をみたが、「募集の趣意に反して論文めきたるもの説教じみたるものなどがあつて是ならば創作として認めらるといふものは頗る少かつた」ため、最終的に審査の結果「当選作

なし」となった<sup>\*36</sup>。

締切直後からさっそく歌詞の審査にかかるのかと思いきや、実はまだ選者が決まっていなかった。1923年1月20日の会合で、ようやく東西本願寺から1名ずつ、他派から1名、外部から1名の審査員を選ぶという方針が出た<sup>\*37</sup>ものの、2月になって実際に決まった顔ぶれはそれとはやや異なり、次の通りであった。

宗歌の方は新派と旧派とに分れ旧派の予選に東は井澤勝什氏西は痴山義亮氏、新派の方には東より橋川正氏西より野村成仁氏を出し最後の選者は尚未定<sup>\*38</sup>

予選である程度作品数を絞り込んだうえで、外部から招聘する選者を交えて最終選考を行う段取りだったと思われる。予選にあたる選者を「新派」と「旧派」それぞれから選んだことから、応募作品の文体はさまざまであったことが推測される。ここで、予選にあたった選者の経歴をみておこう。

- ・井澤勝什（旧派、大谷派）：声明の大家で要職を歴任。俳誌『懸葵』等に和歌を発表。
- ・痴山義亮（旧派、本願寺派）：和歌や上代様の書に優れた学僧。
- ・橋川正（新派、大谷派）：大谷派寺院出身の仏教史学者。当時は、真宗大谷大学学部助教授兼予科教授。
- ・野村成仁（新派、本願寺派）：東京高等師範学校付属音楽学校<sup>\*39</sup>（現東京藝術大学音楽学部）出身の平安中学校音楽教師。明治末から「讃仏歌」の作曲を担っていた。

その後、3月9日に開催された委員会で、外部の選者に御歌所寄人の佐々木信綱が決定した<sup>\*40</sup>。この委員会開催を予告する『中外日報』の記事に、「宗歌は応募の作品概して面白からぬ由で」<sup>\*41</sup>とあるが、審査の結果、1等は該当作なし、2等に大谷派本宗寺の土呂基という人物の作品が選ばれ、東京音楽学校教授の島崎赤太郎に作曲が依頼されることとなった。土呂は、「新聞社に勤める文学好きな人だった」といわれ、佐々木信綱が3番を補作したが、ほぼ原作の形で採用されたという<sup>\*42</sup>。

作曲を依頼した島崎赤太郎からは、3月23日に楽譜が到着した<sup>\*43</sup>。歌詞の最終決定がいつだったのか、資料から確定することはできないが、仮に9日の委員会で決定したとしても、島崎は2週間弱で曲を完成させたことになる。島崎が当時勤務

していた東京音楽学校に残された「作曲委託関係書類」\*44には、真宗各派協和会からの依頼状等は確認できない。そのため、島崎個人への依頼だった可能性が高いが、その選定理由や島崎に支払われた作曲料等を示す資料は現在のところ見つかっていない。また島崎自身はクリスチャンであったが、そのことへの言及・批判等も、管見の限り特に見当たらない。当時島崎は、東京音楽学校へ依頼された校歌の作曲を多数手がけていたため、その実績が評価され、宗歌をより権威あるものにしようとして白羽の矢がたったのではないだろうか。

### (5) 発表と普及の様子

《真宗宗歌》の正式な発表日は、はっきりしない\*45。『中外日報』1923年3月29日付に、歌詞が掲載されているため、3月末には発表になった可能性も考えられるが、4月には真宗各派では立教開宗700年記念法要が勤められた\*46。したがって、日程的には記念法要になんとか間に合った、というタイミングだったのではないだろうか。

《真宗宗歌》の楽譜は石版色摺で印刷され、一般に頒布されたというが\*47、記念法要において、完成間もない《真宗宗歌》がどのように用いられたのかは、これまで明らかになっていなかった。今回の調査で、本願寺派における状況については『教海一瀾』第682号（1923年4月）に掲載された記念法要の報告記事により、一端を窺うことができた（大谷派の法要での状況は、『宗報』や『中外日報』に記載がなく詳細不明）。7日間にわたる法要・諸行事のなかで、《真宗宗歌》にかかわる記述がみられるのは、第3日（4月17日）と第6日（4月20日）、そして最終日（4月21日）である。

第3日は「全国日曜学校教師大会」が、開館したばかりの顕道会館で行われた。日曜学校運動は、本願寺派では明治末からさかんになり、1915（大正4）年には宗派が全国に日曜学校の設置を命じるなど、積極的に制度の整備を進めていた。その教師を対象とした大会において、「宗歌宣伝等をプログラムに組」みこんでいたという。

#### 第三日

全国日校教師大会　この日の呼物である全国日校教師大会は午後一時より顕道会館に於て開催、〔…〕宗歌宣伝等をプログラムに組み〔…〕

宗歌宣伝隊　龍谷大学器楽部の二十余名のオー<sup>マ</sup>ゲストラ団の人達と中央日曜学校の生徒を中心にした宗歌宣伝隊は、憩ふに間のない位、彼方此方の凡ゆる

会合に招かれて喝采を博してゐる

日曜学校会館 日曜学校の参考品児童の読物等備へてオルガンで讃仏歌、礼讃、宗歌等を講演の合間に入れて班員四十名は変るゝ汗水しぼつて大獅子吼の有様 \*48（下線は引用者）

《真宗宗歌》の宣伝にあつた「宗歌宣伝隊」は、龍谷大学の学生によるオーケストラと、中央日曜学校のグループで、あちらこちらで演奏を行ったようだ。また、境内に設けられた「日曜学校会館」という施設では始終講演会が行われ、その合間に《宗歌》もオルガン伴奏で歌われたことがわかる。

第六日

八百人の大コーラス 平安中学校全生徒八百名は渡辺校長に引卒せられ法要参拝をなしたが真影堂前に於ては野村教員の指揮により宗歌宣伝隊のオーケストラに合奏し宗歌を合唱した、そのゆかしさそのおごそかなることは終りに近き法要の一クーリであつた

布教使大会 集るもの五百余名、花田執行の訓示次で龍大学生の宗歌宣伝オーケストラあり \*49（下線は引用者）

第6日は、平安中学校（現在の龍谷大学付属平安高等学校）の生徒800名が法要に参拝し、「野村教員」、すなわち歌詞の予選にもかかわつた同校の音楽教師・野村成仁の指揮で、宗歌宣伝隊と共に《真宗宗歌》を合唱した。発表からのわずかな期間で、生徒たちがどの程度歌えたのかは定かでないが、野村としては責任の重い場面だつたと思われる。また、この日は布教使大会も行われ、そのなかでも宗歌宣伝隊が演奏した。

第七日

最後の努力 日校館の学生四十名、児童五十名の宗歌及び讃仏歌の合唱それには言ふことの出来ない力を見せてみた \*50（下線は引用者）

そして最終日にも、日曜学校会館では《真宗宗歌》や「讃仏歌」の演奏が行われた。1週間もの間、報じられているようにながりの頻度で演奏したのであれば、宣伝隊の学生・生徒たちの演奏もかなり上達していたのではないだろうか。

このように、《真宗宗歌》の初期段階の普及にあつては、すでに仏教讃歌を歌

うことに慣れていた学生・生徒のはたらきが大きかった。法要が始まると、毎日地方から5万人の団体参詣者が京都駅を訪れたという<sup>\*51</sup>。その一部にでも歌声が届いたならば、発表間もない《宗歌》の宣伝としては、かなりの効果だったのではないか。また、法要終了後には楽譜が各派で再版され、有償で配布された<sup>\*52</sup>。その告知にも「日曜学校その他広く普及することを囑望します」と記されており、普及対象として子どもが念頭に置かれていたことが、ここからもわかる。なお、本願寺派以外の宗派における状況の調査は、今後の課題としたい。

### 3. まとめ—イベントとしての宗歌制作

ここまで、《真宗宗歌》制作にかかわる真宗各派協会の結成から立教開宗700年記念法要までの状況を、『中外日報』や本願寺派・大谷派の機関誌をもとに振り返ってきた。以上をふまえて、最後に《真宗宗歌》誕生の意義について考えてみたい。

長い歴史のなかで分裂と対立を繰り返してきた真宗各派が、立教開宗700年を機に協調の姿勢をみせたことは、画期的な出来事だった。とはいえ、《真宗宗歌》をはじめとする記念事業の話し合いがなかなか進まなかったことをみても、それぞれの事情や思惑ゆえ、かんたんに歩調がそろったわけではないと推測される。それだけに、紆余曲折を経て発表された《真宗宗歌》は、真宗各派協調の象徴として重要だったのではないだろうか。

ここで、《宗歌》の歌詞内容を改めて確認しよう。3番からなる歌詞の1番は、浄土真宗の教えに遇えたよろこびが描かれる。続いて2番では、そのよろこびのうち念仏とともに日々の暮らしを送る姿を、3番ではよろこびを周囲の人々にも伝えてともに歩もう、と謳う。つまり、この歌詞は浄土真宗における理想的な信仰生活をテーマとしている。それゆえ、『中外日報』の記事でも言及されていたように、詞としての面白味には欠けるかもしれない。では、この詞が1等なしの2等選ばれた意味は、どこにあるのだろうか。

「懸賞」というイベントは、溝渕久美子が指摘するように、応募者にとってはイベントそのものへの参加意識をもたらすとともに、当選への期待を伴うものであり、いざ当選となれば充実感や社会的な評価を受けたことによる大きな喜びを得ることができる。その意味で、「懸賞」はそうした人々の情動への働きがより強いメディア・イベントでもあり、それと同時に、その懸賞のテーマについて思いをめぐらせるなかで、人々はその対象を内面化し、それにそうテキストを編み出してい

く<sup>\*53</sup>。であるならば、浄土真宗の「宗歌」を懸賞募集によって制作するという試みは、応募者に、浄土真宗とはどのような宗教で、真宗の僧侶・門徒とはいかにあるべきか、教えが自分にとってどのような意味をもつのか、を問い直させる作業であり、それに合致する土呂の詞が宗歌に選ばれたのはある意味当然だったといえるだろう。その意味では、このような内容の宗歌をことあるごとに歌わせることは、明治期以来行われてきた、紀元節・天長節といった行事における《君が代》や「祝日唱歌」の歌唱と重なる。これらの唱歌には、歌うことを通じて、天皇を中心とした日本という国の国民としての意識をからだに沁みこませることが期待されていた<sup>\*54</sup>。また、行事のたびごとに歌うという点では、宗歌はこの頃さかんに制作されるようになった校歌の位置づけと近い。校歌の起源と成立を研究した須田珠生は、「校訓」や「母校精神」を歌詞にうたう校歌を、学校に在学する児童や生徒に歌わせることで、教育的な効用が期待できるという考えが、当時の教育者らのあいだで広く共通した認識であったことを指摘している<sup>\*55</sup>。歌詞募集時の趣意書に言及はないものの、《真宗宗歌》にもこれらと同様の効用が期待されていたことは想像に難くない。宗祖の和歌を歌詞とする宗歌の場合も、そこに教えや宗祖の思いなどが凝縮されていると捉えられるからこそ宗歌として成立するわけだが、和歌という形式上、抽象的な表現となる場合もあろう。《真宗宗歌》の強みである明確なメッセージ性は、懸賞募集というその制作過程から生まれたのである。

発表後、《真宗宗歌》は募集の段階から「永久に」と想定されていたように、この100年間歌われ続けてきた。その要因のひとつには、島崎赤太郎による旋律が音域にも配慮され（最低音から最高音までがちょうど1オクターブに収まっている）、さほど難しくもなく覚えやすい、という音楽的な理由もあろう。その結果、行事等における《真宗宗歌》の斉唱は今やルーティーンとなっており、講習等の折に改めて歌詞の意味を尋ねても、往々にして「考えたことがない」という答えが返ってくるような状況さえみられる。しかし、「意味は分からなくても、同じ曲を歌える集団があり、自分もその一員だと認識できる」というこの有様は、《真宗宗歌》の団体歌という性格に鑑みれば、それぞれが所属する宗派、さらには浄土真宗という大きな宗教的枠組みへの帰属意識の醸成が今なお連綿と行われているのであり、《真宗宗歌》は今なお真宗各派の象徴として機能しているといえるだろう。

以上を踏まえて、「宗歌」を定義づけるならば、「近代日本において、特定の宗教共同体の象徴として、西洋音楽の語法により作曲され、発表された歌。歌詞は、教えやそれを信仰する人々の理想像などを表現し、共同体意識を醸成することを目的として法要や儀式、行事等で歌われる」ということになるだろう。

興味深いのは、この「宗歌」というジャンルが第1章でみたように、少なくとも日本においては仏教各派に多くみられる一方、聖歌や讃美歌を有し、音楽を重視するキリスト教には確認されない、という点である<sup>\*56</sup>。須田珠生は、「各学校が自らその学校固有の校歌を制定し、児童や生徒にうたわせるというのは、世界的にも稀である」とし、「こうした校歌のありようを鑑みれば、学校が固有の校歌を持ち、それをうたうという行為は、日本特有のひとつの文化であると言ってもよいだろう」と述べている<sup>\*57</sup>。さらに、法令等において学校に校歌制定が義務付けられていないにもかかわらず、「今日、日本の学校では、一学校一校歌という構図が作られている。この構図を作りだしたのは、他でもない学校である」と指摘する<sup>\*58</sup>。

これにならば、宗歌も法令等で制定は義務付けられていないにもかかわらず、宗派が自ら制作し、法要・行事の折に歌うことを定めた団体歌である。真宗の場合は、前述のように各派協調の象徴として宗歌が必要だったのだが、他の仏教団の場合はどうだったのだろうか。近代日本における団体歌や仏教団の近代化を考えると、ポイントとなる問題であろう。稿を改め、検討したい。

#### 【参考文献】

- 飛鳥寛栗 2008 『仏教音楽への招待』本願寺出版社。
- 小川博司・木村篤子 1996 「戦前における新聞社の音楽文化事業」『近代日本のメディア・イベント』同文館、297-323頁。
- 白金昭文 1981 「近代における仏教讃歌と伝道」『印度學佛教學研究』29巻2号、857-859頁。
- 季武嘉也 2004 「大正社会と改造の潮流」季武嘉也編『大正社会と改造の潮流』日本の時代史24、吉川弘文館、7-96頁。
- 須田珠生 2020 『校歌の誕生』人文書院。
- 筒井清忠編 2021 『大正史講義』ちくま新書。
- 筒井清忠編 2021 『大正史講義 文化篇』ちくま新書。
- 中西直樹 2023 「立教開宗700年のころの真宗教団」『中外日報』2023年5月3日付5面。
- 藤本葉子 2005 「永井幸次作品目録」『大阪音楽大学研究紀要』第44号、35-190頁。
- 福本康之 2007 「宗教共同体の歌」『世界音楽の本』岩波書店、377-380頁。
- 溝渕久美子 2012 「懸賞というメディア・イベント」『映画研究』第7号、22-39頁。
- 御手洗隆明 2019 「大正昭和期『宗祖御誕生・立教開宗』慶讃法要私観」『教化研究』165号、真宗大谷派教学研究所編、36-71頁。
- 湯浅成幸 2011 『親鸞さまのみ教え—「真宗宗歌」に聞く』真宗大谷派宗務所出版部。
- 吉見俊哉 1996 「メディア・イベント概念の諸相」『近代日本のメディア・イベント』同文館、3-30頁。
- 鷲田清一編 2018 『大正＝歴史の踊り場とは何か—現代の起点を探る』講談社選書メチ

工。

渡辺裕 2007 「学校と職場の共同体意識」『世界音楽の本』岩波書店、373-376頁。

渡辺裕 2010 『歌う国民』中央公論新社。

【註】

- \*1 西洋音楽のスタイルで書かれた仏教音楽作品を指す。この音楽ジャンルに対しては、創作に関係した団体や年代によって、「仏教唱歌」「讃仏歌」「仏教聖歌」等、さまざまな名称が用いられてきた。本論文では、歴史的事象として記述する場合をのぞき、浄土真宗本願寺派での現状にない、「仏教讃歌」ないし「仏教音楽作品」で統一する。
- \*2 『正像末和讃』に収められた一首を歌詞とする仏教讃歌。本願寺派では主に、澤康雄作曲（1918年発表）と、清水脩作曲（1952年発表）の2作品が歌われる。
- \*3 真宗教団連合公式ウェブサイトでは「1923年8月5日発足」と記載されている。「教団連合のあゆみ」（<https://www.shin.gr.jp/about/ayumi/>）2023年7月30日最終確認。しかし『中外日報』では、「真宗各派協議会」の名称が1921年11月から用いられており、さらに1922年6月に「真宗各派協和会」に改称する、と報じられている。本稿では、資料からの引用を除き、「真宗各派協和会」で統一する。
- \*4 『法規類纂抜萃』中央仏教学院、1937年、113-116頁。
- \*5 同上、117-118頁。
- \*6 「真宗宗歌」『仏教音楽辞典』法蔵館、1995年、341頁。
- \*7 「和訳正信偈・仏教讃歌」真宗教団連合公式ウェブサイト（<https://www.shin.gr.jp/activity/shoshinge/>）2023年7月30日最終確認。
- \*8 渡辺2007：373頁。
- \*9 福本2007：379頁。
- \*10 小川・木村1996：317頁。
- \*11 吉見1996。
- \*12 今岡達雄「宗歌」『WEB版新纂浄土宗大辞典』（<http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/%E5%AE%97%E6%AD%8C>）2023年7月30日最終確認。
- \*13 「讃仏歌」は、本願寺派における日曜学校運動において、教材のひとつとして明治末から大正期にかけて盛んに発表された仏教音楽作品群の名称として知られる。
- \*14 「仏教唱歌」の名称は、主に明治時代に用いられた。
- \*15 現在確認されている最も古い仏教讃歌は、1887（明治20）年の資料にみられる《法の深山》である。
- \*16 写真は、浄土真宗本願寺派総合研究所が2006年に行った「仏教音楽コレクション・A」（飛鳥寛栗氏主宰）資料調査にて撮影したもの。なお現在、同コレクションは相愛大学図書館に寄託され、整理が進められている。
- \*17 『新纂浄土宗大辞典』では、この旋律について「明治二〇年（一八八七）文部省発行『幼稚園唱歌集全』第二六『風ぐるま』（豊田英雄作詞、東儀季照作曲）の旋律と類似していることから、この譜の一部を使ったとの説もある。また天台宗宗歌とも旋律が同一であることなどから、この時期に各宗の宗歌に同じような旋律がつけられたと考えられる。」としている。
- \*18 表記は、資料記載のままとした。

- \*19 『仏教唱歌集』においては、「超世の悲願ききしよりわれらは生死の凡夫かは有漏の穢身はかわらねど心は浄土に遊ぶなり」（帖外和讃）が、七五調の歌詞による《いろは》と題する作品（作曲者未詳）の歌詞のひとつとして掲載されている。
- \*20 中西2023。
- \*21 「開宗記念に親鸞の鑽仰新団体計画」『中外日報』1921年10月7日付2面。
- \*22 「在京真宗各派懇談会」『中外日報』1921年10月23日付2面。
- \*23 「動き出した開宗記念運動」『中外日報』1921年10月8日付2面。
- \*24 「開宗記念日は四月十五日に決定」『中外日報』1921年11月9日付2面。
- \*25 「真宗各派協議会」『宗報』第243号（1922年1月）、19頁。
- \*26 「真宗各派協議会」『中外日報』1921年12月18日付2面。
- \*27 『宗報』第243号、前掲。
- \*28 「真宗各派協議会」『中外日報』1922年3月26日号付2面。
- \*29 「祖徳讃仰の懸賞募集決定」『中外日報』1922年6月1日号付2面。
- \*30 季武2004。なお、季武は、「改造」を、『デモクラシー』をも含んだ『世界的基調』を踏まえた上で、日本国家と日本国民の実情に即した形での体制の変革を志向した思想や運動」と定義している。
- \*31 「社説立教開宗記念慶讃御垂示に就て（三）」『教海一瀾』第671号（1922年5月）、4頁。
- \*32 市民歌には330編の応募作があり、1923年4月に選考が行われた。市民歌の当選者は高田耕甫、童謡は吉田栄次郎、作曲はいずれも山田耕筰に委嘱された。市民歌は都歌に準ずる扱いで、現在まで継承されている。
- \*33 「真宗の懸賞募集と選者の選定」『中外日報』1922年7月9日付2面。
- \*34 「懸賞創作応募少し」『中外日報』1922年9月17日付2面。
- \*35 「懸賞募集の成績」『中外日報』1922年12月2日付2面。ただし、応募数には資料により相違があり、『宗報』第258・259号（1923年5月、28頁）では、「三百五十」。この点については、当時の真宗各派協和会に関する資料調査が望まれる。
- \*36 「懸賞創作に当選作なし」『中外日報』1923年4月26日付2面。
- \*37 「各派協議の事項」『中外日報』1923年1月23日付2面。
- \*38 「懸賞創作の選者」『中外日報』1923年2月10日付2面。
- \*39 東京音楽学校は、1893（明治26）年6月から東京高等師範学校へ移管され付属学校となり、1899（明治32）年4月に再独立した。
- \*40 「真宗各派協和会委員会」『宗報』第257号（1923年3月）、34頁。
- \*41 「真宗各派協和会」『中外日報』1923年3月9日付2面。
- \*42 『メロディーの宝石箱』浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所編、本願寺出版社、1997年、9頁。3番の歌詞については湯浅成幸が、佐々木信綱による補作の結果、「当時の天皇制国家の時代状況を反映したように、真宗の教えが玉虫色のようなあいまいな表現になっているように思われます」と指摘している（湯浅2011：14）。しかし、管見の限り原詞は現存せず、判断は保留せざるを得ない。
- \*43 「宗歌の作曲」『中外日報』1923年3月25日付2面。
- \*44 東京藝術大学未来創造継承センター大学史史料室（<https://archives.geidai.ac.jp/contents/re-composition/>）2023年7月6日最終確認。

- \*45 湯浅成幸は、「この真宗宗歌が発表されたのは、「立教開宗七百年記念法要」が勤められた一九二三（大正十二）年の四月九日であります」としている（湯浅2011：12）。4月9日は大谷派の記念法要初日であり、湯浅の記述が正しければ、大谷派の法要開始に合わせて発表されたことになるが（注46参照）、筆者はこれを示す資料を確認できておらず、今後さらなる資料調査が必要である。
- \*46 大谷派が4月9～15日、興正派が11～17日、木辺派が14～18日、佛光寺派が15～18日、本願寺派が15～21日。
- \*47 『仏教音楽辞典』、前掲。『宗報』第262号（1923年8月）、ページ付けなし。当時配布された楽譜は、現存が確認されていない。
- \*48 「立教開宗慶讃法要記事」『教海一瀾』第682号（1923年4月）、10頁。
- \*49 同上、13頁。
- \*50 同上、14頁。
- \*51 中西、前掲。
- \*52 対価は、20枚まで1枚1銭、21枚より1枚9厘、101枚より8厘（送料別）。『宗報』第262号、前掲。
- \*53 溝淵2012：37頁。
- \*54 渡辺2007：369頁。
- \*55 須田2020：138頁。
- \*56 カトリック中央評議会、日本基督教団、日本聖公会、日本福音ルーテル教会、日本バプテスト連盟、在日大韓基督教会に、宗歌にあたる団体歌の有無を尋ねたところ、カトリック中央評議会、日本基督教団、日本福音ルーテル教会から「特定の讃美歌を団体歌として制定する習慣はない」との回答を得た。
- \*57 須田2020：12頁。
- \*58 須田2020：15-16頁。